

山形市上敷免遺跡出土の墨書土器

山形大学 三 上 喜 孝

一 稽文

〔淨カ〕

(1) 「□万下西寺」

図版 86 - 61

外面の体部から底部にかけて、正位に墨書されている。このうち、「寺」と判読できる文字は底部に、その他の文字は体部に書かれている。

体部に書かれた文字は、底部の文字に比べて小さく扁平であり、体部に無理に収めようとして書いたように見える。このことからすると、まず体部に「寺」の文字を書いた後、体部に収まるように四字を書いたか、あるいは、底部に「寺」がくるように体部に四字分を収めた、といった可能性が考えられる。

「寺」の字を書いた墨書土器は、全国的には数多く出土しているものの、山形

県内ではほとんど確認されておらず、米沢市笛原遺跡から土師器の壺に「寺」と書かれたもの（九世紀初頭から中葉か）や、遊佐町浮橋遺跡から赤焼土器の

体部外面に正位で「寺」と書かれたもの（一〇世紀前半か）が各一点出土するなど、きわめて少ない。また、本遺跡出土の「寺」墨書土器は一字ではなく、複数の文字が書かれている点が注目される。

「寺」の前に複数の文字がみえる場合、一般には寺名を墨書したものと解されている。寺名を書いた墨書土器には、大きく分けて

①「觀音寺」「法華寺」「四天王寺」などの一般的な寺名。

②「高岡寺」（千葉県佐倉市長熊廢寺出土）「坂津寺」（佐倉市坂戸遺跡群広遺跡出土）「草刈於寺壺」（千葉県市原市草刈遺跡）など、小字名を冠した寺名。

の二種がみられる。このことからすると、本遺跡出土の寺名は、小字名を冠した寺名をあらわしている可能性があるが、現段階では不明である。

(2) 「盃」

図版 81 - 18

内面黒色土器の高台付皿の底部外面に墨書されている。

「益」の可能性もあるが、残画から「盃」と読むのが妥当と考える。器種は高台付皿であり、内面に黒色処理を施している。この器の用途を記したものか。

(3) 「春」

図版 107 - 303

須恵器の高台付壺の体部外面に横位で墨書されている。

「春」の可能性もあるが、字画を観察すると、「春」とみるのが妥当であろう。「春」の墨書土器は、秋田県横手市（旧雄物川町）の大見内遺跡から出土している例がある。「春米連」というウジ名の一字を記したものか。

(4) □

図版 107 - 309

須恵器壺の底部外面に墨書されている。断片のため判読できないが、残画から「丑」の可能性がある。

「丑」を記した墨書土器としては、酒田市（旧八幡町）俵田遺跡出土の須恵器蓋のつまみに書かれた例がある。

(5) □万

図版 82・29

須恵器壺の底部外面に墨書されている。「万」の上に墨痕が認められるが、断片であるため判読不明である。

(6) □万

図版 117
- 416

須恵器壺の底部外面に墨書されている。「万」の上に墨痕が認められるが、断片であるため判読不明である。

ほかにも墨痕が認められるものがみられるが、断片のため、判読不明である。

一 考察

墨書土器とは、墨を使い、文字や記号を記した土器のことである。ヘラなどによる線刻で書いた刻書土器というのもある。土師器や須恵器といった古代の食器に書かれたものが多く、おもに八世紀から一〇世紀ごろの遺跡から出土している。全国各地で出土しており、山形県だけでも、これまで五〇〇〇点以上の墨書土器が確認されている。

内容は、地名や人名、内容物を記したものや、吉祥的な文字を記したものなどさまざまであり、どのような目的で書いたものかをはつきりさせることは、難しい作業である。遺跡の性格や、一緒に出土した他の遺物の検討を通じて明らかにしなければならない。

ただひとついえることは、日常で使用している場合にはわざわざ文字を記す

必要はないわけで、なにか非日常的な行為にともなって文字が記されたことは間違いない。それは、お祈りであったり、お祭りであったり、集団の宴会であったり、といった場面だったのかもしれない。いずれにしても、墨書土器は、古代社会に生きた人々のものの考え方を知ることのできる、貴重な資料といえる。

本遺跡出土の墨書土器でまず注目されるのは、「寺」と記されたものである。しかも、「寺」の他に複数の文字が確認できることから、寺名が記されていた可能性がある。記載された文字が寺名であるとした場合、それが何を意味するのかについては、現段階では不明といわざるを得ない。いずれにせよ、山形県内では「寺」墨書土器の出土例がきわめて少なく、その意味では貴重な資料といえる。

また、「弔」と読める可能性のある墨書土器が出土している点も注意される。仏教的な意味合いの強い墨書がみられるることは、本遺跡の特徴といえるのかもしれない。

これに関連して興味深いのは、平安時代前期の九世紀後半に属すると思われる伴出遺物の中に、両面が黒色処理され、口縁が強く外反し、取っ手の付け根が壊れた痕跡を持つ土器がみられることがある。これはいわゆる柄香炉（焼香に用いる金属製の道具）を模したものである可能性があり、この遺跡で、なんらかの仏教的な儀礼が行われていた可能性が想定できる。「寺」墨書土器も、そうした儀礼の中でとらえるべきものといえるだろう。

ただしここで注意しなければならないのは、「寺」墨書土器の出土は、必ずしもこの場所に「寺」の施設が存在していたことを意味しない、ということである。

この点を確認する上で最もわかりやすい事例は、多賀城市山王遺跡出土「觀音寺」墨書土器（一〇世紀初め）である。墨書土器にみえる「觀音寺」とは、

大宰府觀世音寺と同様の伽藍配置をもつ多賀城廢寺のことを指すといわれている。ただ、この墨書き土器の出土地点は、多賀城廢寺から直線距離でほぼ真西約二キロ、多賀城外郭西南隅から約七五〇メートルにある。

出土した遺構付近からは、「觀音寺」墨書き土器とともに、油煙付着土器（灯明皿）が大量に出土しており、国府主催の仏教行事「万灯会」にかかわるもののか、と考えられている。とすれば、城下における仏教儀式が、多賀城付属寺院である「觀音寺」（多賀城廢寺）のもとで行われていることを、この「觀音寺」墨書き土器は示していると考えられる。いずれにせよ、「觀音寺」墨書き土器の出土地が觀音寺の施設そのものの場所を指していないことは明らかなので、むしろ「万灯会」という仏教行事と関わらせて理解すべきものであることがわかる。

また別の事例として、福島県猪苗町小山B遺跡出土の「報恩寺」墨書き土器をあげる。同遺跡からは、銅椀を模倣したとみられる丸底の両面黒色土器や小型短頸壺が出土しており、仏教的遺物が伴出している点が興味深いが、ただし、「寺」墨書き土器は一点のみで、遺跡も堅穴建物跡が主体であり、寺院・堂と見られる遺構は検出されていない。これもやはり、何らかの仏教儀礼と関わる墨書きと考へるべきであろう。

本遺跡も、このような事例と同様に考へることができる。本遺跡の平安前期の遺構面では、堅穴建物跡が二八棟、掘立柱建物跡が四棟検出されており、これらが寺の施設に相当するかどうかは不明である。本遺跡を必ずしも「寺」施設と結びつけて考へる必要はなく、むしろ何らかの仏教的行事が行われていたことを想定すべきである。むしろそう考へることで、本遺跡出土の墨書き土器が、非日常的行為にともなつて記される墨書き土器の本質とも深く関わらせて考えることができるるのである。

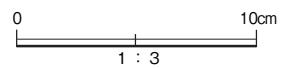
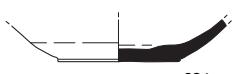
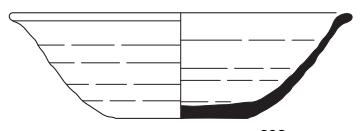
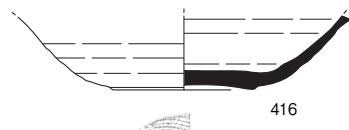
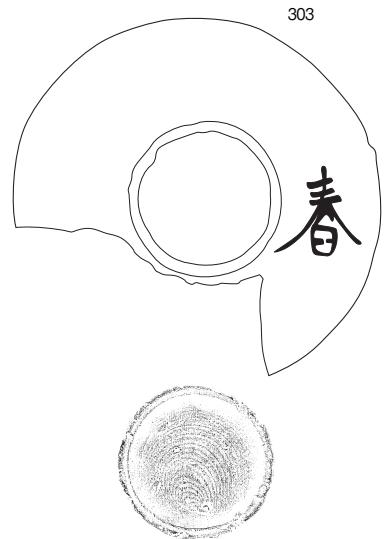
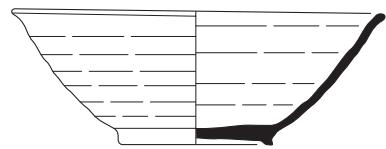
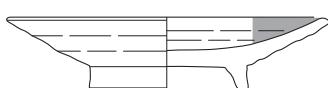
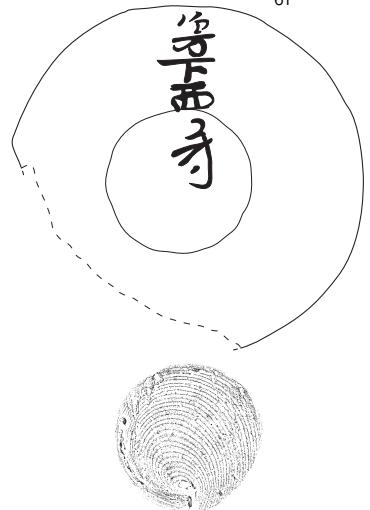
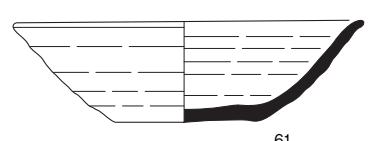
（参考文献）

平川 南「墨書き土器『觀音寺』・多賀城市山王遺跡」『墨書き土器の研究』吉川弘文館、

二〇〇〇年。

三上喜孝「古代地域社会における祭祀・儀礼と人名——墨書き土器の検討から——」
義江彰夫編『古代中世の社会変動と宗教』吉川弘文館、二〇〇六年。

村木志伸「寺の外から出土する『寺』の文字」『帝京大学山梨文化財研究所報』
四七、二〇〇三年。



墨書土器集成図

上敷免遺跡 墨書一覧

図版	写真 図版	種別	器種	出土遺構	墨書位置	文字種	登録 番号	底部調整
81	18	32	土師器	高台付皿	S T 3	底部	「盃」	46
82	29	-	須恵器	坏	S T 7	底部	「□万」	回転糸切
86	61	36	須恵器	坏	S T 26	体部～底部	〔淨カ〕 「□万下西寺」	52
107	303	49	須恵器	高台坏	S T 662	体部	「春」	235
107	308	49	須恵器	坏	S T 662 E P 2	底部	「万」	回転糸切
107	309	-	須恵器	坏	S T 662 F	底部	「丑」カ	回転糸切
111	342	51	須恵器	蓋	S B 597 E B 818	天井部上面	墨痕だけの為 判読不能	49
114	384	54	須恵器	坏	S P 279	底部	「万」	回転糸切
117	415	56	須恵器	坏	グリッド	底部	「万」	回転糸切
117	416	56	須恵器	坏	16 - 18 G	底部	「□万」	回転糸切

墨書位置はすべて外面